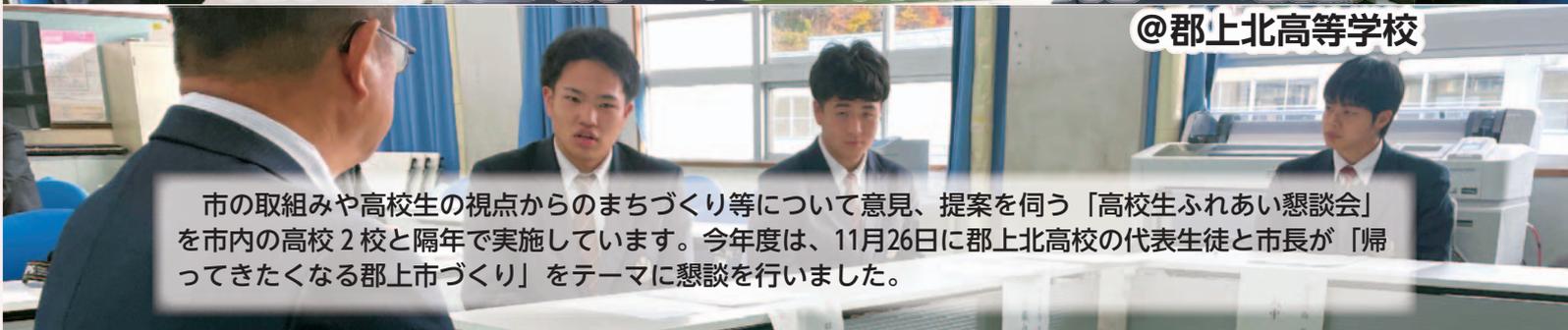




高校生ふれあい懇談会

～市長 × 高校生「帰ってきたくなる郡上市」への挑戦～

@郡上北高等学校



市の取組みや高校生の視点からのまちづくり等について意見、提案を伺う「高校生ふれあい懇談会」を市内の高校2校と隔年で実施しています。今年度は、11月26日に郡上北高校の代表生徒と市長が「帰ってきたくなる郡上市づくり」をテーマに懇談を行いました。

「住民自治」意識の醸成と「新青年団」への期待



市長 人口減少という大きな課題に直面し、郡上市としてどう立ち向かっていくかが重要課題。これまでの地域づくりは、経験豊富な年配者が物事を決めたり、国からの補助金や行政の施策に頼りすぎる傾向にあった。しかし、これを打破し、**市民一人ひとりが地域の課題を「自分事」として捉える意識改革が必要だと考える。**

例えば、自分の地域で何か困りごとがあったとき、市役所を頼る前にまずは自分たちで解決しようと考えてみる、そんな「自分事」としての住民自治を高校生のみんなから始めてほしい。

かつては各地域に「青年団」が存在し、地域を盛り上げる原動力となっていたが、若者世代の人口減少による担い手不足などを背景にほとんど消滅した。しかし、若い世代が中心となり「ミチトキテン」を成功に導いたように、各地域で若者による地域おこしの活動が再び芽吹き始めている。今後は新しい価値観を持つ現代版の青年団「新青年団」として、**きみたち高校生も一緒に郡上市の元気づくりを担ってほしい**と考えている。

高校生からの熱意ある提案に対しては、市としての予算化ができる可能性もあり、市の執行部など大人を納得させるような斬新なアイデアを期待している。**市長室の扉はいつでも開けておくので、良いアイデアがあったら来てほしい。**

学校の枠を超えた共同プロジェクトの推進



まるた りおん
丸田梨音さん（2年 生徒会長） 現在、学校の探究の授業で、「自分たちで決めて行動する」という住民自治に近い「学校自治」を実践しているが、まだ授業に留まっているという感じ。これを、郡上北高校と郡上高校が共同してプロジェクトを進めることで、**もっと大きな力で郡上を興していけると思う。**市長の「自分事」という言葉を受け、**大人がやるものだと思っていた政治が、実は自分たちの責任の中にあることに気づいた。**

市長 その気づきこそが、「自ら治める『住民自治』」の本質。市民一人ひとりが地域の課題を「自分事」と思うことができれば、郡上市はきっと再生すると思う。郡上高校とのプロジェクトも同じ世代同士意気投合して進められるのではないかな。

空き家を「チャンス」に 観光から定住へ



たかはし ゆうと
高橋勇羽人さん（3年 前生徒会長） 八幡市街地の観光客の多さを日常的に感じる中で、**空き家を活用した店舗やイベントを展開することが観光客に「住めばいつでもこの楽しさを味わえる」と思ってもらえる仕掛けづくりになるのではないかと考える。**まちづくりアンケートでも要望の多かった「生活必需品が買える店」や、「ミチトキテン」のように郡上市の魅力を発信するイベントの拠点を運営すれば、**まちはもっと充実するはず。**

市長 空き家が増えることを悲観するのではなく、参入の「チャンス」と捉えた良い視点。一人では難しくても、共同すればできることがあるかもしれないし、どうすれば実現できるかを考え常にアンテナを広く張ってほしい。さらに、既存の行事に新しい要素を加えたり、外部の知見を取り入れるなど、**もっと人が集まるような仕掛けも考えてみてほしい。**

長良川鉄道の「持続可能」な運営形態

多田健佑さん（2年 生徒会議長） ただ けんすけ 白鳥駅から北濃駅間の廃止議論があるが、通学や観光客の利用がある時間帯は残し、利用の少ない時間帯の運行本数を減らすなど、実態に合った効率的な運営で長良川鉄道を残すことはできないだろうか。

市長 鉄道維持には運行赤字も含め、設備整備に郡上市だけで年間約3.5億円という莫大な費用がかかっている。公共交通に関するアンケートによると長良川鉄道を「利用しない」という回答が約9割。「残したい」という気持ちも理解できるが、利用しない9割の市民をどう説得するかという難しい問題に向き合わなければならない。



壮大な交通インフラ「名古屋直通」構想

石徹白真之介さん（3年 前生徒会副会長） いとしろ しのすけ 長良川鉄道をJRや名鉄などの大手に譲渡し、名古屋からの直通特急や快速を走らせることで、利便性と観光力を飛躍的に高めるべきだと思う。交通が便利になれば、進学した若者もUターンしやすくなるはず。

市長 非常に壮大な夢だが、名古屋の人口を呼び込むための投資として考えれば、可能性はゼロではない。しかし実現には困難が伴う。市長としてあらゆるチャンネルを使い、可能性を探ってみたい。



デジタル発信と郡上らしさの追求

大村杏奈さん（2年 生徒会議長） おおむら あんな この懇談で市長の話を直接聞いたのはここにいる6人だけ。市長の熱い思いをもっと多くの若者に届けるために、TikTokやXを活用してもっと発信していただきたい。長良川鉄道の議論も、「貯金が尽きる」といった厳しい現実を数字で知れば、若者も「変えなければ」と思えるはず。

地域づくりでは、都会に勝とうとして娯楽施設を増やすよりも、郡上の強みである「自然」や「地域のつながり」を大切にすることで、田舎を愛する人々を惹きつけるべきだと思う。

市長 みんなには、郡上アンバサダーとなってもらい、友人などに郡上の魅力をたくさん話してほしい。SNSでの発信も重要だが、それ以上に顔を合わせて対話することの大切さを、今日の懇談会を通じて実感している。今後も高校生と対話する機会を増やしていきたい。



世代をこえた「対話」の場の創出

大中惟央さん（3年 前生徒会議長） おおなか いう 世代ごとに抱える課題や目指すまちの姿、ワークライフバランスなどが異なるため、若者と年長者など多世代が異なる視点からアドバイスし合える対話の場があると良いのではないかと。

これまで、「自分たち高校生がこんなことをしても・・・」と、行動に歯止めがかかりがちだったが、この懇談会を通じて今は、ゴールを目指す「途中まで」でもいいからまずは行動に移してみたいと思っている。

市長 例えば、高校生とシニアクラブが真剣に語り合う会議など、様々な考えが混ざり合うことで新しい価値観を生む可能性がある。みんなの率直な思いを年長の人に伝えてもらおうと、きっと良いアドバイスをくれると思う。ぜひ開催したい。



キャスティングボートは君たちの手にある

市長 権利の裏には必ず義務がある。今君たちは、年配の人や働き盛りの現役世代の人に守られている。同時に、これからの郡上を創っていく義務と責任がある。君たちはもう主役。行政や政治を遠いものと思わず、自分たちの手の中にキャスティングボート（決定権）があることを忘れないでほしい。1日1回、どうしたら郡上が良くなるか考えてみてほしい。みんなの思いのベクトルが同じ方向に向いたとき、郡上市は誰にも止められない力を持つと思う。



懇談を通して

今回の懇談会では、財政状況や鉄道問題といった厳しい現実も、包み隠さず共有されました。そして、高校生たちがそれを「自分たちの課題」として真摯に受け止め、未来を見つめる姿は非常に頼もしく、これからの躍動に大きな期待を寄せる機会となりました。市では今後も、高校生、子育て世代、年配の方々など多世代の声を伺い、「帰ってきたい郡上市づくり」に反映させていきたいと思っております。